

文章の作法に関する一つの考察

和田正美*

一 小序

この論文は明星大學日本文化學部言語文化學科の研究紀要のために執筆するものであるが、筆者はこれに先立つて、同じ言語文化學科から刊行される豫定の論文集に掲載すべく、「日本語の文章」(副題「四つの『文章讀本』をめぐって」)といふ小論を書上げた。これは副題から察せられるやうに、『文章讀本』と題される書物(著者はそれぞれ谷崎潤一郎と三島由紀夫と中村眞一郎と丸谷才一)を比較検討することに寄せて日本語の文章の在り方に探りを入れようとしたものであるが、時間と枚数の制約もあつて一回では到底埒が開かないことが判明したので、續きは他の發表機關に載せることにならうと述べておいた。それが目下書きつつあるこの論文であり、だからこれは「日本語の文章」の續篇なのであるが、讀者に向つて、これを讀むのは正篇を讀んでからにしてもらひ

たいと要求することはどう考へても蟲が良過ぎるので、研究論集に書いたことの内容を左に摘記することにしよう。

「一 概括」 谷崎と中村の『文章讀本』は文章を書くことの、そして三島のそれは文章を讀むことの指導を指してをり、丸谷のはその兩者をもくろんでゐるやうに見える。谷崎の主張には様々の誤りが感じられるが、それでも文章の素人に向けられた『文章讀本』としてはこれが最も示唆的である。他の三つにもそれぞれ特徴があり、従つて價值はあるが、三島と中村は『文章讀本』の名において文藝讀本を、丸谷は準文藝讀本を著したと言へよう。

「二 日本語は非論理的な言語か」 谷崎と三島は(彼等における表現方法の相違を無視して述べれば)日本語を語彙に乏しく、構造が不完全な、要するに非論理的な言語と見做すところから出發してゐる。特に三島は、日本の根生の文學に抽象概念が缺如してゐたことに注目して、その特徴は日本文學につきまとひ續けたと説いてゐる。日本の男は長い間外來の抽象概念で身を鎧ひ、そのため感情を殺さざるを得なかつたといふのが三島の意見である。このやうに谷崎と三島の思考の源は同じであるのだが、三島にはなく谷崎にあるのは、日本語の弱點を逆手に取つて含蓄のある文章を書けばよいと彼が考へてゐることである。彼等の主張に理があることは認めなければならぬが、しかしそれは事柄の半面しか傳へてゐないのであるまいか。語彙に乏しく、構造が不完全なのは日本語の初期の姿であらうし、借用された抽象概念はいつしか日本人自身のものになつて日本語の論理的進展に寄與したと思はれるからである。一方、丸谷は昔の日本語が非論理的であつたことはあり得ないと一旦は述べながら、日本語の文章は日本人の並列的思考の型にわざわざひかれてしどけなくなりがちだとも書いてゐる。日本語の論理の裏には

やはり非論理が見え隠れしてゐるらしい。それは何故か。私見によれば（まことに厄介な話であるが）日本人が大陸文明に接觸してその論理を受容した時、彼我の間に懸隔のあり過ぎたことから、日本語の中には論理的に成長する部分とさうではない部分の共存状態がもたらされたのである。丸谷は更に、現代の日本語には和、漢、洋の複合體である現代日本の文明を適確に表現するだけの論理性はまだ備はつてゐないと附加してゐるが、多分その通りであらう。

「三 日本語と日本人の心性」 中村も日本語における論理性の有無を問題にしてゐるが、その日本語に對比させる形で、西洋文化も數千年の中國文化も（すなはち西洋語も中國語も）敵との衝突を通して進化したのだからそこには普遍的な論理が見られるとする指摘はいささか強引であらう。そして表現における自己意識の問題がある。中村は「Love Mary」「我愛杜娘」（我レ杜娘ヲ愛ス）と「（私は）花子が好きです」を比較して次のやうに述べてゐる。西洋語と中國語では主語を省略しないが、日本語としては主語を省略した、「花子が好きです」の方が自然であり、これは日本人が愛の世界で或は對人關係一般において自分を意識することが少ないといふ傾向を表してゐる。自他の區別が明確ではない。また日本語の「好き」には攻撃性と征服欲がなく、それはこちら側の氣分、状態を示すに過ぎないのである、と。しかしこれは疑問である。西洋語と中國語では「Love」や「我愛」が表現の基本的な單位を形作つてゐるが、日本語では述語に主語が内在してゐるのだ、と考へられはしないだらうか。そして一見受動的な「好き」が能動的に働くことだつてなくはない。言葉といふものは關係において考察すべきである。日本語の特徴と日本人の心性がつながり合つてゐることはたしかであり、谷崎もその點に着目して、日本人は古來おしやべりではなく沈黙の美德を

持つてゐるとか、日本人は事物に關する即物的な表現を嫌ふとか述べてゐるが、前者は餘りにも一面的な見方であらうし、後者は正しいとはいふものの、もし谷崎が西洋語には婉曲表現がないと考へてゐるのなら、それは誤解といふものである。

研究論集のために記したことの内容はざつと見て以上の通りであるが、日本語の文章の在り方といふやうな微妙かつ廣大な問題で私が確信と言へるほどのものを持つてゐるわけではなく、だから私は先輩諸氏の言説に對して批判者として臨まうとしてゐるのではない。もとより批判は行ふが、それは正しくないかも知れないことを承知した上での、従つて修正することもあり得る批判である。それ以外の態度を執ることは『文章讀本』の著者達に、といふよりは悠久の日本語に失禮であらう。

さて今回は谷崎の主張を中心にして、必要があれば他の人々の意見をも吟味しながら述べて行くことにする。

二 主語の省略は何處まで可能か

日本語では主語の省略が可能であることをめぐつて中村眞一郎が日本語は、主語を省略しない西洋語や中國語より普遍的ではないと考へてゐることはすでに見た通りであるが、それに對して谷崎潤一郎は文法を重視しない立場からこの現象を日本語の大きな特徴として積極的に評價しようとしてゐる。次に掲げるのは谷崎が引用してゐる源氏物語「空蟬」の卷の一節をそのまま寫したものである。

ねられ給はぬまゝに、われはかく人に憎まれてもならぬを、こよひなんはじめて世を憂しとおもひしりぬれば、はづかしうて、なが

らふまじくこそ思ひなりぬれなどのたまへば、涙をさへこぼして伏したり。いとらうたしとおぼす。

實を言へばこれは谷崎の『文章讀本』の「敬語や尊稱を疎かにせぬこと」といふ節に出て来るものであつて、そこでは敬語や尊稱の無視すべからざる所以が説かれてゐるのだが、それにしてもこの例文は主語の省略といふ當面の問題にとつて好箇の實例であらう。

これだけの短い文章の中に、隠された主格が二つある。「ねられ給はぬ」と「のたまへば」と「おぼす」に對應するのは源氏の君であり、「涙をさへこぼして伏した」のは源氏の従者なのである。このことから日本語では、「誰が何をした」の「誰」がなくても、然るべき状況さへ整へてやれば、意味が通じること、言換へれば述語は主語無しで一人歩き出来ることがわからうといふものである。その状況をもたらずものは右の例のやうな敬語・尊稱（一先づ谷崎に従つてこの二つを並べて置くが）であつたり、男言葉と女言葉の違いであつたり、前後の文脈であつたりするだらう。

私は拙稿に先立つ「日本語の文章」の中でもこの問題に觸れて（この論文の「小序」においても手短かに記した通り）日本語では述語に主語が内在してゐるのではないか、しかし必要に応じてそれを外在化させることも出来るのではないかといふ見解を一つの假説として提出しておいた。その當否は讀者の判断に委せるしかないが、それはどうであれ、かういふ種類の言語は世界の言語の中では少數派であらうけれど、これはこれで他の諸々の言語に對等性を主張し得るものであるやうに思はれる。日本語の述語の中には主語が含まれてゐるのではないかといふ私見を推し進めると、ひよつとして日本人の意識の世界では最初に動きがあつ

て人はそれについて行くのかも知れない、すなはち動きが主であり人は従であるのかも知れないといふ考に誘はれるが、これは、主語を省略しない西洋語や中國語の意識では自分と他人を對立關係においてとらへるのだといふ、私には承服し難い中村説を裏返しただけのやうな氣がして、とてもそこまではこはくて言へない。

しかし日本語において主語の省略が如何に自然とはいへ、それにも限界があること、ここで私流儀の言ひ方を繰返せば、主語を外在化させた方がよい場合が多々あることをも私達は心得ておかなければならない。（この文の中の「私達」はこれがなくても「心得て」の主語が誰なのかはぼ明らかであらうし、これと「私流儀」の「私」がぶつかり合ふことも目障りであるが、それでもこれを挿まないと意味がうつすらばやけ、語調も悪くなるやうな氣がしたので入れることにした。）そしてこのことについての谷崎の認識は充分ではないやうである。谷崎は上田秋成の「兩月物語」の一節を取上げて、そこにある十のセンテンスの内の五つは歌人の西行を主語にしてゐるが、西行の名は何處にも使はれてゐない、換言すれば主格は一度も明示されてゐないと誇らしげに報告してゐる。⁽¹⁾谷崎が引用した長い全文をそつくり再引用する必要はあるまいと思ふので——この「思ふ」に「私は」をかぶせることはないでせうね——最初の二つのセンテンスだけを抜き出して見ることにしよう。

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黄葉みすごしがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の煙、浮島がはら、清見が關、大磯小いその浦々、むらさき艶ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蜩が管屋、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のとじまらぬかたぞなきに、猶西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年

の秋は、葭あしがちる難波を経て、須磨明石の浦吹く風を身にしめつも、行く／＼讃岐の眞尾坂の林といふにしばらく筈つまをとどむ。草枕はるけき旅路の勞いたはりにもあらで、観念修行の便たよりせし庵いなりけり。

右の第一のセンテンスの主語は西行であり、このことは読者が文章の内容から類推しなければならぬが、次のセンテンスは「観念修行の便せし庵なりけり」といふ結びからして主語が「人」であることはあり得ず、これはセンテンスの前に、「(西行が) 筈をとどめた場所は」と補つて讀むことになる。谷崎はここで主格のことに加へて、現在形と過去形の混淆のことも問題にしてゐるのだが、話を主格に絞ると、もし主語の省略といふ現象が日本語の本質に根差してゐるとすれば、さしづめ秋成のこの文は日本語の文章を代表するものとなり、谷崎がこれを「模範的な日本文」と見做したことは無理もない。だからこの文はこれで差支へないのであるが、谷崎はその主語の省略を強調する姿勢において故意か偶然か見落してゐることがあるやうに思はれてならない。(この拙文の「谷崎」以下は表現としていささか文字通り拙こないかも知れないが、それでも「思はれて」を「谷崎は」に結びつけてしまふ読者はゐないでせうね。)

谷崎が引用した秋成の文に登場するのは西行ただ一人である。読者は隠された主語が西行であるとわかれば、いや、それがわからなくても、ここでは同一人物の行動が叙されてゐるらしいと見當をつけられれば、この文を讀下すことが出来る。しかし登場人物が二人或はそれ以上であつたら、秋成の手法は適用され得べくもない。そんなことをしたらその文章がたちどころに破綻を來すことは火を見るよりも明らかであらう。勿論、前掲の源氏物語の文例のやうに、敬語を使用して二人の人物を

描き分けることが出来れば問題はないわけだが、誰にでもわかる通りこのやり方は過去のものといふよりほかはない。人物が三人以上の場合には尙更である。そこで私達は文章の混乱を防ぐために主語を「外在化」させることになる。谷崎にしても實はその小説の中でそれをしてゐるのである。いふまでもないことながらその勞を惜しんで讀者に「これ誰が言つたのだらうとか誰がしたのだらうとか考へこませるやうでは、その文章は出来損ひでしかない。國木田獨歩の「牛肉と馬鈴薯」が失敗してゐるのはそのためであらうと思はれる。

それにしても主語の出し入れが可能なのは日本語の文章の何と便利な特徴であらうか。言はずもがなの場合や同一主語が續くやうな場合にはその主語は省いた方がよいのだし、男女の會話を映す際には男言葉と女言葉の使ひ分けが自ら主語を指示する役割を引受けてくれる。日本語では述語に主語が内在してゐるのだといふ私見は滿更思ひつきではないと已惚おぼれたくもなる。

だからといつて主語の出し入れが行へない西洋語や中國語を融通の利かない言語であると考へたりしてはならない。彼は彼であり、此は此である。いづれも人間がその中で生活し、その中で自分を解放することが出来る言語であるからには主語の有無といふ一事で兩者の優劣をあげつらふことは慎おそむべきであらう。

とはいへ常に在る主語と常に在るわけではない主語との間には何か微妙な違ひが存してゐるのかも知れない。この二つに同一の名稱を與へることさへ(私は主語といふ文法上の述語を一先づ日本語にも當嵌あはめてゐるが)實は正しくないのかも知れない。主語が常にある言語とさうでない言語をそれぞれ使ふ人々の心理がその違ひにおいてどう分れて來るかといふ問題は興味深いが、現在の私にとつてそれを追求することは残念

ながら望外の沙汰といふものである。

この章の見出しにした「主語の省略は何處まで可能か」といふ問に私は、うしろめたいことではあるが、次のやうな一般論的なやり方でしか答へることが出来ない。

主語が省ける場合には思ひ切りよく省いてしまふこと。この點では源氏物語や兩月物語のやうな古文ばかりか明治以後に成立したいはゆる口語文にしたところで大いに参考になる。といふのは現代でもおおよそ文章の名に價する文章の書き手は、皆、言はず語らずの内にこのことを實踐してゐるからである。もつとも現代小説などでは時々、明らかに同一人物の述懐であるといふのに、「私は」や「××（固有名詞）は」が途中でひよいと飛び出して來ることがあるけれど、あれは書き手が讀み手に主語を再確認させようともくろんでゐるか、それとも語調を整へたいと考へてゐるか、そのどちらかであらう。かういふことはもとより許容されてよい。

そして主語を入れた方がよいと意識される場合にはこれも思ひ切りよく入れてしまふこと。すでに述べた通り無用の混亂は避けなければならぬ。このことのお手本は翻譯小説であると言ひたくなるが、必ずしもさうは言へない。最近の翻譯小説は一昔か二昔前の歐文直譯體のそれとは違つて、よきにつけあしきにつけこなれた日本語でものされるやうになつてゐるのだから。

大切なのは日本語のリズムがそこに生きてゐることを感じさせながら、それと同時に讀者の誤解を招かないやうに書くことであり、私達はこの要請に従つて主語を見せたり、引つこめたりしながら書いて行くことになるが、日本語の文章の傳統的なリズムは主語の省略に結びつきやすく、誤解の防止は主語の明示に結びつきやすいであらう。主語の問題をめぐ

る文章作法の要諦はこの二つを兼ね合せる呼吸の中に潜んでゐるのではないかと考へられる。

三 敬語について

1 谷崎潤一郎の敬語論

谷崎が源氏物語の一節を材料にして、敬語には省かれた主語を指示する力もあると述べたことを前章で取上げたが、この一事に限らず、谷崎の敬語への思ひ入れは並大抵のものではなく、彼は「品格について」といふ見出しに續けてその内容を、「一 饒舌を慎しむこと」、「二 言葉使ひを粗略にせぬこと」そして「三 敬語や尊稱を疎かにせぬこと」の三つに區分してゐるのである。⁽²⁾ところが谷崎以外の『文章讀本』作者は(揃ひも揃つて谷崎のファンであるにもかかはらず)誰一人として敬語の問題にページを割かうとはしてゐないのだ。これは三島と中村と丸谷の三人が敬語には無關心であつたり、或はもつと積極的に反敬語主義者(つまりその點では反谷崎主義者)であつたりするからだらうか。まさかさうではないであらう。彼等にして見れば敬語は書き言葉ではなく話し言葉の領域に屬する事柄であり、従つて『文章讀本』の主題にはなり得ないのであるに違ひない。

私はこの二組の態度からどちらか一つを選べと言はれたら谷崎を捨てて、他の三人を選ぶ。たしかに敬語の使ひ方が現代の文章作法の内容を形作ることはむづかしい。敬語はもつぱら話し言葉の一部として扱はれてゐるやうに見える。が、それなら、敬語は文章を讀んだり書いたりすることに、特にそれを書くことに何の影響力も及ぼし得ないのかと質せ

ば、多くの人が（よくわからないがままに）多分それは違ふと答へるだらう。右の二者擇一では谷崎を採らなかつた私も彼の敬語論を無價値とまで考へてゐるわけではない。敬語への谷崎の思ひ入れを一顧だにしないことは正しくないと思ふ。

谷崎は敬語を——それ（特に敬語の動詞助動詞）は主語の省略を可能にするといふ議論を別にすれば——文章の、或は言葉の品格と私達の禮儀作法に結びつけてゐる。この品格といふことでは、「品格ある文章を作りますにはまづ何よりもそれにふさはしい精神を涵養することが第一であります、その精神とは何かと申しますと、優雅の心を體得することに歸着するのであります」³⁾といふ方向に話を發展させてゐる。そして谷崎はこの「優雅の心」を「優雅の精神」に置換へて、「優雅の精神とは、このわれ／＼の内氣な性質、東洋人の謙讓の徳と云ふものと、何かしら深い繋がりがあるとこのものを指す」と述べるのである。

以上のやうな品格、禮儀作法、優雅の心、謙讓の徳を背景にして成立つものもとより敬語だけではなく、敬語をその一環とした所のものであり、谷崎はそれに様々な表現を與へてゐる。

私達は品格のある文章を書くことに努めなければならぬ。それはその通りである。しかし谷崎からかう言はれて戸惑ふのは私だけではないであらう。谷崎は間違へてゐると言ひたいのではない。間違へてはゐないかも知れない、だが無條件に正しいとも思へない、といふいはば中間的な心境が戸惑ひと焦立ちを強ひる。

東洋人と日本人の混同や東洋人は西洋人のやうに自己主張をせず上の者を敬ふことを知つてゐるのだといふ指摘などは粗雑と評することが出来るけれど、私はそのやうな批判にうつつを抜かしたくはない。問題は谷崎の所説が文章を書く實際にどう生かせるかといふことである。『文

章讀本』の讀者は單なる一般論ではなく、さういふ技術的な手ほどきをも必要としてゐる筈であるが、谷崎はその『文章讀本』のこの箇所（無理もないこととはいへ）それを開陳することをよくなし得なかつた。（谷崎が例示してゐる頼山陽の書簡は候文であり、現代人には餘り参考になるとは思へない。）せいぜい、女子は文章の中でも敬語を使つて、「父が云つた」ではなく、「お父様がおつしやいました」と書いたらどうなのかと勧める程度である。

谷崎は敬語を含む表現の美しさ、奥床しさに魅せられ、それを強く訴へはしたが、そこから先に進むことはしなかつた。谷崎の主張を補ふ意味からも、ここで他の論客に登場して貫はなければならぬ。

2 福田恆存の敬語論

福田恆存の「敬語について」は全體がうまくまとまつてゐるとは言ひ難いやうに思ふが、この論文の出來榮えはともかく、その中に福田獨特の炯眼が感じられることは事實であり、これは敬語の本質について考へる際の大きな参考になる。福田は敬語を尊敬語と謙讓語と丁寧語に分け、論文の終り近くで、丁寧語と表裏の關係にある親疎語といふカテゴリーを付加してゐるが、彼の議論の出發點は、敬語をなくさない限り日本に民主主義や平等思想は育たないといふ考へ方を否定するところにある。福田によれば敬語はそれらの近代的な主義・思想とは無關係なのである。それでは何故日本では複雑な敬語が發達したのか。福田はその理由を日本語の構造の中に求め、日本語の動詞の終りの語尾（特にu音で終る現在形）は單調で締りがなく、居坐りが悪く、そのやうな不便から逃れようとする努力が數多くの助動詞を發生させたのではないかと推論し、

「……せさせ給ふ」に至つては居坐りの良き、語調を美しく整へるための言廻しとしか考へられないと述べてゐる。

この見解に接して、『助動詞だけに敬語の役割が負はされてゐるわけではあるまいに』といふ疑ひも起るが、助動詞以外の敬語表現は敬語の助動詞と手を取合つて發達したのだと考へてよいのなら、この疑問は一應のところ解決する。そして福田論文の獨創性は蓋し次のことの中に求められるであらう。敬語の源が語尾の安定感への欲求の中にあるのだとすれば、敬語は文字通りの「敬ふ言葉」であるとは一概に言へないことになる。換言すれば敬語の使用にはそれが向けられる相手へのことさらな敬意が伴ふとは限らないといふことになつて来る。福田がはつきりさう書いてゐるわけではないが、彼の主張はどう見てもさういふ結論に辿り着く。その點、谷崎にとつて敬語は目上の人を尊敬したり、目下の者が自分を卑下したりする東洋道德の表れ以外のものではなかつた。

福田説に従ふと敬語の本質は一見したところの尊敬心や自己卑下にこそ寄せた丁寧さの中にあり、更にそれを軸として成立つ何物かこそ敬語の何たるかを開示するものであると考へなければならぬ。『繪本太閤記』では織田信長に謀叛を起した明智光秀がその信長に關して、「上様」、「右大臣の御首」といふやうな尊敬語を使つてゐることであり、江戸時代の歌舞伎などでも目上の者が目下の者にその種の尊敬語を使つてゐる例が多く見られるとのことである。福田はこれらの實例を前提にして次のやうに記した。

それらは形は尊讓語であつても、心理的には相手を遠く隔て、距離を置く事によつて、現在論^{あけつち}つてゐる事、或は命じてゐる事柄を、親しさ、馴れ合ひの對人關係から救出し、客觀化、或は客體化しよ

うといふ心の働きと見做されます。詰り、そこには目上の者と目下の者との距離が計られてゐると同時に、話題にしてゐる事柄に對して兩者が等しい距離を以て接しようといふけぢめの感覺が働いてゐると言へませう。

ここに書いてあることが正しければ尊讓は衣であり、それに蔽はれた内體は意外にも、共通の事柄をめぐる彼我の對等、平等であることにならう。すでに述べた通り、福田は敬語と民主主義、平等思想の間には何の關係もないと言ひ切つた人であり、そのことを楯に取つてこの指摘は整合性を缺いてゐると言ひ募ることも出来なくはないが、多分それは文章の字面にのみこだはつて、主張の中味には分け入らうとしない態度でしかない。書き言葉であれ、話し言葉であれ、その心理は單なる形式上の論理を以て律せられるものではないだらう。

現に福田はこれに續けて、この心懸けを忘れてしまつたら、「民主主義どころか個人主義すら成り立ちません」(傍點、引用者)と述べてゐる。そして福田は次のやうに言ふ。

敬語、殊にその根幹を成す丁寧語、親疎語こそ日本の近代化の梃だつたと言へませうし、それが亂れに亂れた今日は、親疎、公私のけぢめを失ひ、個人個人が徒らに近代化の齒車と化し、公から疎外された人間同志が敬語などとは水くさいとばかりに、馴れ合ひの自己喪失に陥り、擧丸の握り合ひをスキンスリップなどといふ外國語に頼つて甘つたれに逃避してゐるとしか言ひ様がありません。

如何にも福田らしい辛辣な文章であるが、このいやがらせに對して、

『そんな馬鹿げたことがあるものか』と言つて濟ませられるだらうか。少なくとも私にはこれを一蹴するだけの勇氣は湧いて來ないのである。もつとも本來的には敬語を使ふべき状況でわざとそれを使はず、しかもそれが「馴れ合ひ」でも「擧丸の握り合ひ」でもないやうな場合だつてないとは言へない。右の一文で説かれたことを唯一無二の基準として振りかざすには及ばない。福田が敬語の心理的側面を言ひつくしたわけではない。しかしこの論客が敬語の本質の或る部分に鮮やかな光を投げ掛けたことは疑へないやうに思はれる。

3 謀叛人の心性

『繪本太閤記』では光秀が謀叛を起した後も信長に敬語を使つたとされてゐることを知つた時、私ははしなくも石川淳の小説『紫苑物語』の中の謀叛のくだりを想ひ起した。その箇所に行き着くまでのあらずちを以下にごく簡略化された形で記しておくことにする。

都の歌の家に生れた宗頼は歌の道を捨てて弓の道に入り、そのことを勅選集の選者である父に忌まれて、遠國に逐ひやられ、そこで國の守として過すやうになるが、彼はその弓の技術に物を言はせて、良民を次々に殺す。そして宗頼は都から連れて來た白痴同然の、それでゐて淫亂きはまりない妻（權門の娘）を疎んじて、その土地の、とはいへ氏素性の知れない美女・千草（實は狐の化身）を寵愛する。その宗頼に目代の藤内が謀叛を起すのである。藤内は性的不能者であつた筈なのに宗頼の妻との情交に成功し、それに力を得た結果、かねてから企んでゐた謀叛を實行に移すべく、一味徒黨の者どもの前で次のやうな演説をした。

めんめん、たしかに聞け。この藤内こそ、こよひ姫といひかはして、夫婦の契をむすんだぞ。およそこの國の守の位につくべきものは、まことは姫その人、すなはち姫の夫たるに恥ぢぬものがその任にあたるべきぢや。姫をないがしろにして、うまれも知れぬ化性のもとなはむれるがごとき、かの守めはもはや位をうしなつたも同然ぢや。まして、この日ごろの亂心悪行は、國中これをにくまぬものは無い。今や、姫の夫はおれぢや。すなはち、おれがまことの守ぢや。おれの背には、うしろ楯として、都なる姫の家の權勢がある。おつけ、都よりおもてむきに、ありがたき沙汰をかうむること必定ぢや。かねがね申しあはせたとほり、無道の守めをほろぼすことは、ここに名分あきらかにて、一夫の紂を伐つがときものよ。めんめん、こよひをすござず、守めを討つてとれ。かの賊は日の高いうちから閨にこもつてすがたを見せぬ。やつめに弓をとらせるな。ただひた押しに閨に押し入つて、討て。千草もおなじ枕に討て。もつとも、千草を所望のひとつとあらば、こぞつてこれを犯せ。（傍點、引用者）

一讀して明らか通り、宗頼に關する藤内の言葉づかひには敬語のかけらもない。藤内は主として仕へる宗頼を唾棄すべき極悪人としてのみ扱つてゐる。光秀の言葉づかひをめぐる福田恆存の見解をこの箇所へ拘子定規に適用すれば、藤内には謀叛の擧を客觀化、或は客體化しようとする心の働きのないことになるが、さうであるとしたところで、藤内のこの科白を作者の筆がすべつた出來損ひであるなどと速断してはならない。それどころか『紫苑物語』のこの箇所は何の抵抗感もなく讀める名文である。光秀と藤内の態度はささやかな比較の作業に堪へ得るかも知

れない。その際、どちらも文字資料に基いてゐるのだから、實在の人物と架空の人物の相違は問題にはならないであらう。

すべては謀叛の、或はそれを支へるものの性格に掛つてゐると考へてよいのではないか。第一に（これは謀叛の支へ、背景に屬してゐるが）主従関係のことがある。光秀は信長との間に紛れもない主従関係を結んでゐるが、藤内は岩山の向うに擴がる自由の土地で生れ育ちながら、その土地の氣風になじめず、岩山のこちら側で拔群の事務能力を生かして目代に成り上つたことを宗頼に見破られた男であり、すなはち彼等の主従関係はほんの形ばかりのものでしかない。藤内にとつて宗頼は最初から主にして主ではなかつたと云へよう。

そして第二に（もとよりこれは右の事柄と深くかかはり合つてゐるが）主従関係の中で保たれてゐた用語を崩すことなく謀叛の擧に出た光秀に見れば、主君の弑逆は武將として、男としての誇りを賭けた事業であつたに相違ない。たしかに「上様」、「右大臣の御首」といふ敬語は光秀の誇りを毀損しない効果を發揮してゐる。もし『繪本太閤記』の作者が光秀にも藤内のやうに、「無道の信長め」とか「かの賊」とか口走らせてゐたら、光秀の威信は地に墜ちたことであらう。それに引き換へ、主君である國の守を悪しざまに罵る藤内はたまたま轉がり込んだ好機を利用して守の位を篡奪しようとする匹夫下郎に過ぎない。精神の高さにおいてこの二人は比ぶべくもないのである。敬語はあだやおろそかには出来ないといふ一先づの結論が引出せる。

但し以上のことは謀叛人の言葉づかひとその心性の關係を二つの實例に即して考察したまでであり、石川淳の『紫苑物語』の價值を暗示するものでは毛頭ない。そのことをはつきりことわつておく。この小説は宗頼といふ純潔な少年を中心にして全ての登場人物が等分に描き込まれた

ところの、高度の完成に達した作品であり、藤内の下劣さは作品の枠の中にすつぽり収まつてゐて、讀者に、この男はさうあるべきだといふ印象をしか與へない。藤内の謀叛は作者によつて、これ以外のものではあり得ないやうに仕組まれてゐる。

4 敬語と文章

過ぐる大戦の後、いはゆる戦争犯罪人として處刑された人々の遺書を以前に讀んだ時、或る「戦犯」が妻に宛てて、「×子殿は氣の毒ですが仕方がありません」と書いてゐるのを眼にして、胸を衝かれるやうに感じたことがある。×子さんはその「戦犯」の精神薄弱の子供だといふことである。「戦犯」は妻はもとより、そのやうな我が子にも「殿」といふ尊稱をつけてゐる。勿論、それは必ずさうしななければならないわけのものではないだらう。（現に尊稱抜きで妻子に呼び掛つてゐる遺書も決して少なくはない。）右の箇所は、「×子は氣の毒ですが仕方がありません」とも書けるし、何ならもつと崩して、「×子は氣の毒だけれど仕方がないだらうね」と書いても差支へない筈である。丁寧體の文章といへども、語り掛ける相手が特に親しい人である場合には、時々くだけた表現を挿入すると却て文章が引き立つといふ事實は文章作法の初歩的な心得の一つに數へることが出来る。

しかし考へても見るがよい。「戦犯」である夫とその妻はこの遺書を最後にして幽明境を異にするのである。さういふぎりぎりの状況の下で父が子を、精神薄弱であれ何であれ、自分と對等の、獨立した人格の持主として扱ふことは私には少しも不自然とは思はれない。この「戦犯」といへども處刑される前に妻子と拘置所の金網越しに對面してゐれば、

我が子に「×子」とか「×子ちゃん」とか呼び掛けたであらうが、それは身内の話し言葉の上でのことであり、かういふ場合には、話し言葉と書き言葉の次元の隔たりを考慮に入れる必要がある。丸谷才一も指摘してゐる通り、文章の——丸谷は「文章」ではなく「文體」と書いてゐるが——基本には公的なものがあることを私達は忘れるべきではない。夫妻の、そして父子の永訣を前にして、二重の意味で不幸な運命（先天性障害と父親の刑死）を背負はされた愛児を「×子殿」と記したことは、無實の罪で處刑される「戦犯」の潔さと、不條理な死を進んで迎へ入れようとする彼の心情の氣高さを表してゐるやうに思はれてならない。福田恆存の言葉を借りれば、これこそけぢめといふものであらう。

現代では話し言葉の一部としてのみ見られてゐるかの如き敬語を書き言葉すなはち文章の領域に少しは引寄せられないかと思ひながらここまで書いて來たが、この試みにはやはり限界があるやうである。谷崎潤一郎のいはゆる講義體が主流を占める現代の文章の中で敬語が占める位置はあつても微々たるものであらう。しかしここで話し言葉と書き言葉の關係について一考することは無駄ではないと思ふ。私見によればこの二つは明らかな相互補完の關係にある。現代の文章がとかく意味を傳へるだけで、筆者の息づかひを感じさせず、言葉のふくらみを缺いたものになりがちなのは——と書いて自分の文章のことを考へると私は背筋が寒くなるが——一つには話し言葉の中にもさういふ性格があるからではないだらうか。現代人の文章が得てして論理の域に達しないのは現代の日本語が現代の日本文明を表現するだけの論理性を未だ獲得してゐないからだといふ丸谷の見解に私は「日本語の文章」の中で賛意を表し、この論文の最初の方でもそれに軽く觸れておいたが、同じことを違ふ角度か

ら見ると、話し言葉の亂れに、或はその無味乾燥に無頓着なことが書き言葉に波及してゐるのだとも言へるやうに思ふ。せめて敬語だけでも——たとへば尊敬體では「れる」「られる」への一邊倒をやめるといふ風に——もつと正しく、きちんと使ふやうにしたなら、必ずやそれは文章にも好ましい影響を與へるであらうと感ぜられるのだが如何なものか。最後に文章の中の敬語の使ひ方に一つだけ注文をつけておく。問題は「先生」といふ尊稱の使用が可能な範圍である。自分が御世話になつた先生のことを——假にそれが鈴木先生だつたとして——どんな場合にも鈴木先生と書かなければならないものかどうか疑はしいといふ氣がする。恩師を偲ぶ文章の中で鈴木先生と書くのは當り前だし、先生の著作物への書評として、「このたびの鈴木先生の御勞作を拜讀して……」と書くのもまあいいことにしておかう。私にとつて氣懸りなのは、誰か先生と對等の人物を同時に取上げなければならぬ場合である。「このことについて高橋氏はかう考へてをられるやうだが、それに對して鈴木先生は……」といふ書き方には感心出來ない。これでは文章の中へ個人的な人間關係を持たんだことになつてしまひ、その關係の外に置かれた高橋氏に失禮といふものである。或はそれを裏返したものといふべきか、「高橋氏はかう考へてをられるやうだが、それに對して私の大學院の指導教授の鈴木は……」と、鈴木先生を呼び捨てにして書く人もある。以前に新聞でこの手の書き方を賞揚してゐるのを見かけたが、私はそれを讀んで、とんでもない話だと思つた。これは筆者と指導教授の關係をひけらかす點で第一の例と何等擇ぶところが無い。かういふ場合には高橋、鈴木御兩人の呼稱を同じにすることで文章の客觀性の確保を圖るべきであらう。

文章における私と公の問題はその氣になればいくらでも掘下げられる

やうに思はれる。

困つたことになつてしまつた。(研究紀要に發表する論文の中にかういふ軽い文を書きつけることは氣が咎めるし、お前の文章作法はこの程度のものなのかと言はれさうでもあるが、他に適當な言ひ方が見つからないのでこのままにしておく。) またしても枚數と時間の壁にぶつかつたのである。ここから先は「大和言葉と漢語」について論じるつもりだつたが、他日を期するより他はない。拙文の讀者には、中途半端な論文を御見せしたことを御詫びするものである。(この「御詫びする」は「御詫び申し上げる」とした方がよいのだらうか?)

註

前回同様、今回も四つの『文章讀本』をベースにし、それぞれ次の版から採つた。

『谷崎潤一郎全集 第二十一卷』中央公論社 昭和四十九年六月十日普及版

『三島由紀夫全集 第二十八卷』新潮社 昭和五十年八月二十五日

中村眞一郎『文章讀本』新潮文庫 昭和六十三年四月三十日四刷

丸谷才一『文章讀本』中公文庫 昭和六十年十一月十五日五版

とはいへ今回の論文では三島と中村の『文章讀本』は單に名を擧げただけなので、これらは省き、取敢へず谷崎のをa、丸谷のをbとしておき、cとdは次の二つに宛てることにする。

c 福田恆存「敬語について」『なぜ日本語を破壊するのか』(英潮社 昭和五十四年十二月十日重版) 所收

d 石川淳「紫苑物語」『石川淳集・新選現代日本文學全集2』(筑摩書房 昭和三十四年五月二十日) 所收

- (1) a 一三六―一三八頁
- (2) a 二一八―二一九頁
- (3) a 二一九頁
- (4) a 二一九頁
- (5) c 一七六頁

- (6) c 一七六頁
- (7) d 一九七頁、但し漢字は正字體に變へた。
- (8) この遺書はたしか『世紀の遺書』(巢鴨遺書編纂會編 昭和二十八年十二月一日初版)の中で讀んだが、この遺書集は大部のものなので、今、讀み返しても、該箇所が見つかからない。しかしこの箇所には以前に何度か眼を曝したので、決してあやふやな記憶ではないと信じてゐる。論文の中の引用文の出典を明示し得ないことは心苦しいが、再び調査するつもりなので、讀者にはしほしの御寛恕を御願ひする次第である。
- (9) b 一八二頁
- (10) a 一八七―一九〇頁
- (11) b 二八五頁